

【海外留学レポート】

## 留学の「失敗」

### —次のステップへのきっかけ—

#### “Failure” of Study Abroad: Chance for the Next Step

独立行政法人日本貿易振興機構 **大井 裕貴**

Oi Hiroki

(Japan External Trade Organization, JETRO)

キーワード：韓国、就職

#### はじめに

2013年2月から1年間、私は韓国・ソウル大学に留学した。韓国語がペラペラになって授業で活躍したい—そんな「成功」をぼんやりと夢見て、周囲が就職活動に励む大学3年生の春休みに韓国へと向かった。

そもそもの留学のきっかけは、小学生のときにテレビで見た北朝鮮のアナウンサーだった。威圧するかのように1音1音を力強く読み上げる女性の姿に興味を湧き、何を話しているのか知りたくなった私は、ラジオ講座でハングルの勉強を始めた。だが、ラジオを聞きながら眠ってしまうことが続き、数か月で挫折してしまった。

1度諦めたハングルだったが、大学で第二外国語として再挑戦した。大学に入り、多くの人との新たな出会いがあった。しかし、話題がなかった私はいつも自己紹介に悩んでいた。そこで、分かりやすい特技を身に着けるため、ハングルの勉強に取り組んだ。

勉強を進めると、言葉だけでなく朝鮮半島の政治や文化、歴史にも興味を湧いた。日韓・日朝の緊張した国際関係、市民の手で成し遂げた民主化、軍事政権期に私の故郷である名古屋を破って開催地となったソウル五輪など興味は尽きなかった。現地でさらに学びを深めるため、私は留学を決意した。

では、果たして私の留学は「成功」したのだろうか？留学開始から5年後の今、振り返ってみよう。

## 情に厚くも厳しい韓国社会

「地下鉄の駅はどこですか？」

留学初日、韓国に着いてすぐに突然年配の女性に道を聞かれた。1年間分の大きな荷物を抱えた、明らかにこの街に来たばかりの外国人に道を聞くとはいったいどういうことだろうか。いきなりカルチャーショックを経験した。ただ、幸い地下鉄の場所はわかっていたので、拙い韓国語で行き方を伝えた。すると、怪訝そうな表情を見せることなくただ「カムサハムニダ（ありがとうございます）」と言って、彼女は去って行った。

どうやら、韓国のおばさんはその土地に詳しいかどうかや韓国語の発音なんて細かいことを全く気にしないようだった。その後おばさんからは、日本人と日本語で話していたのに道を聞かれたことや、居酒屋で大きなケーキをフォークに刺しながら「私が作ったの」と言って口に突っ込まれたこと、ユッケをそのまま食べようとしたら「こうすると美味しいのよ」と言って勝手にごはんを混ぜられてしまったこともあった。おおらかで人情味あふれる、韓国のおばさんが大好きになった。

ソウル大学に行ってみると、自分の大学（東京大学）と同じように真面目な学生が多かった。ただ、人前では愛情表現を慎むカップルが多い東大とは異なり、なんと両手をつないで歩いたり抱擁や口づけを堂々で行ったりして愛情を直接表現するカップルが多く、少し困惑した。

図書館では多くの人が勉強に励んでいた。しかし、読書をしている学生はあまり多くなかった。試験勉強に精を出す、さながら「就職予備校」だった。留学前、ソウル大学の学生には既存の社会に抵抗して韓国の民主化運動を牽引した、エネルギッシュなイメージを抱いていた。しかし実際に見た彼らは現在の社会で生き抜くために心血を注いでおり、韓国社会の厳しさを垣間見た。



新緑（春のソウル大学にて）

## 授業での活躍

3月に授業が始まり、「政治学」と「国際政治学」、そして語学学校で韓国語を受講した。

特に印象に残っているのは「国際政治学」である。授業の中で自分のレポートが2回も取り上げら

れた。まだ先生の言葉をよく理解できない中で、拙い韓国語で発表することは非常に緊張した。それでも、授業に貢献している実感が湧いて嬉しかった。他の学生とは異なる、日本の観点から意見を述べられたことが誇らしく、語学力が劣っていても自分のアイデンティティを活かすことで活躍できることに気づいた。

一方で、議論にうまく参加できず悔しかったこともあった。核兵器がテーマの日に、日本で軍縮について学んでいたにもかかわらず、自らの意見を整理できず発言ができなかった。被爆国の出身であるからこそ意見を提示したかった。

また、授業では国際政治の前線に触れる機会もあった。当時北朝鮮が「ソウルを火の海にする」と威嚇するほど国際情勢は緊張していた。モンゴル人留学生は騒乱から退避するため帰国していた。しかし、講師の「戦争が起こると思う人？」という質問には誰も手を挙げなかった。そして、結局戦争は起こらなかった。一方「将来の統一を望む人？」という質問には3割程度が手を挙げた。韓国の若者の肌感覚が少し分かった気がした。

留学後半には「韓国近現代外交史」と「人口変動と高齢化社会」、「幸福と社会福祉」を受講した。

「韓国近現代外交史」では、19世紀以降の朝鮮半島の国際政治史を学んだ。江華島事件や日清・日露戦争等に直面し、伝統的な中華秩序から主権国家体制へと国際システムの転換に揺れ動く朝鮮半島の歴史を韓国の視点から学べたことは実に貴重な経験だった。韓国語や英語、漢文で書かれた課題の論文を、多いときには1週間で500ページ以上読む大変な授業であったが、その分得るものは大きかった。ただ、現地の学生は密かに手分けして読んでいると学期末に聞いたとき少しがっかりした。

「人口変動と高齢化社会」や「幸福と社会福祉」では、韓国の国際結婚に関して75分も発表したり突然課題が命じられたりするなど大変なこともあったが、自分の意見について先生やクラスメートから評価されたときは嬉しかった。

これらの授業で共通して学んだことは、社会の多数者と異なる世界で育った自らの経験・知識を現地の人と伝え合うことで、より良い社会の実現に貢献できるということである。マイノリティでありながらも存在価値が認められたことは大きな自信につながった。



虹（夏の大邱にて）

## 仲間との協調

授業以上に、韓国語を含む多くのことを学んだのがサークル活動である。

まず、韓国文化を理解するため韓国文化交流サークルに入った。だが、集合場所に行くと、そこは「日本の歴史歪曲を糾弾する」セミナーの会場だった。やや戸惑ったが、報道でしか触れたことのない「反日」を体感できる貴重な機会なので参加した。「文化交流では『正しい歴史』を伝える必要があり、『日本が歪曲した間違った歴史』は正さなければならない」という論理のもと、日韓の古代史教育を批判するセミナーが約3時間続いた。首肯しかねる内容だったが、否定せずに話を聞いてみた。セミナー後の飲み会では「日本は神社など歴史的建造物を大事にしている！」「スシが大好きだ！」「俺たちは同じ民族じゃないか！」と私の肩を組みながら優しい言葉がかけられた。どうやら、日本を激烈に批判する「反日」の人でも日本の全てが嫌いなわけではないようだった。

なお、後日 SNS 上で問題が起り、そのサークルは分裂してしまった。私は友人が多い方の集団に移ってしばらく活動を続けたが、サークルの活動目的が「韓国文化の発信」になり私の関心とは異なっていたため、数か月後に脱退した。

より自分の経験や知識を活かせる場所を探し、日韓歴史交流サークルに入った。原爆や「慰安婦」問題、朝鮮戦争など日韓の歴史問題について毎週議論し、長期休暇には日本の大学生との合宿をした。時には口論もあったが、議論を通じて日韓の異なる立場を理解し合う、非常にいい機会だった。対立する相手に自らの立場を説明するときは、主張の意図や背景を丁寧に伝えなければ理解が得られないということを学んだ。旅行や飲み会なども含めて濃密な時間を過ごし、仲間との深い信頼関係が生まれた。

最も印象的だったのは冬の合宿である。個人的には講演等で通訳を務め、チーム別のディスカッションでは議論をまとめ上げることができた一方、運営面で大変なことが多かった。「慰安婦」問題に関連して、在韓日本大使館前のデモへの参加をめぐり大きく対立した。デモについて、韓国の学生は「女性の尊厳を求めるための行動」として積極的な参加を求め、日本の学生は「日本への威圧的行動」として否定的にとらえており、妥協点を見出すことが難しかった。日韓の多くの関係者と議論を重ね、納得がいかないことや口論になることも少なくなかったが、最終的にデモには参加しないという結論で決着した。合宿最終日の前日に翌日のプログラムの大幅修正を迫られたときは、午前4時を過ぎても良いアイデアが浮かばなかった。議論が膠着する中、私が新たな進行方法を提案し、仲間達も同意してくれた。その結果最終日は大きく盛り上がり、参加者の多くが喜んでくれた。合宿終了後、仲間との別れでは抱擁を交わし、大粒の涙を流した。私は自信と誇りを抱いて留学を終えた。



青空（秋の水原にて）

### 留学は「失敗」だった？

留学を通じて韓国語の意思疎通が可能になり、授業では自らの取り組みが評価された。韓国語がペラペラになって授業で活躍する、「留学の『成功』」に満足して意気揚々と凱旋した。

では、その後留学経験を私はどのように生かしたのか、帰国後の4年間を振り返ってみよう。

帰国後、私は就職活動を本格的に始めた。留学中は、「韓国でしかできないことをやろう」と考えてほとんど就職準備をしていなかった。説明会等に参加し、留学経験を日本社会に還元できるような仕事に就きたいという考えが固まった。特に、日本と対立する韓国の考え方を日本社会に向けて咀嚼するとともに、様々な分野で協力することで韓国との国際関係を改善させたいという思いが高まった。これは、現地の授業で得た学びとも強く関連している。

この思いを実現するため、日韓関係に携わることのできる官公庁での就職を希望するようになった。一方で、韓国企業や韓国での就職はほとんど検討しなかった。名古屋と東京で生まれ育った私の人生の基盤は日本にあった。また、自分の人生を韓国に限定してしまうことを恐れてもいた。

だが、希望どおりの就職はできなかった。原因は準備と熱意が不足していたためだろう。自己PRを急造したが、内容に自信がなかった。留学経験に引きずられて内容が韓国関連に偏り、具体的な業務にどのように生かしたいのかうまく説明できなかった。また、大学入学時から準備してきた留学を満足して終えたことで、当時の私は燃え尽きていた。留学の次に何をしたいかわからず、本当にこの組織に落ち着いてよいのか、と迷いながら就職試験を受けていた。ショックもなかった。

その後メーカーや商社など数十社を受験したが内定は得られなかった。韓国留学と就職をどのように結び付ければよいのかわからなかった。面接官から「あなたは就活に向いていません」と言われたこともあった。結局就職をいったん諦めることにした。

帰国後数か月で、留学をして本当に良かったのかわからなくなった。留学しなければすんなりと就職できていたかもしれないと当時は思っていた。だが、単に実力がなかっただけである。留学したか

らといって簡単に就職できるはずがない。進路を見据えることなく心の赴くまま留学した、当然の帰結だったのかもしれない。高くなった鼻がへし折られた。



曇天（冬のソウルにて）

### 留学を日本で活かす

進路を就職から転換し、関心のある分野をより深く掘り下げるため大学院に進学することにした。同時に、留学で得た経験をどのように日本社会で生かすのか、真剣に模索するようになった。

大学の卒業論文では、日韓の「慰安婦」問題における国際法上の論点について書いた。留学中に友人と「慰安婦」について口論をしたことがあった。国際法の解釈の違いから起きたこの口論は、非常に悲しく、また強く印象に残っていたためこのテーマを選択した。

大学院では、韓国を離れて、一般的な国際法の理論的側面について研究した。卒業論文や留学から、学問的基礎を疎かにしては個々の具体的問題を適切に論じられないことを痛感していた。韓国から少し距離を置きたいとも考えていた。ただ、留学で得た問題意識は忘れず「個人の救済と友好的国際関係」を実現するための国際法上の制度について研究した。

さらに、朝鮮語のラジオ番組を編集するアルバイトを始めた。留学で身に着けた韓国語を活かして仕事をするのは非常にやりがいを感じた。また、韓国人の同僚のように速くは編集できないからこそ、日本人である自分は話者の思いをできるだけ丁寧に正確に伝えることを心掛けた。加えて、自らの韓国語能力の未熟さに気づかされた。アルバイトを始めた頃の私の韓国語は、ほとんど日本語の直訳だった。しかし、番組原稿を書く専門家は、日本語の発言内容を朝鮮語で伝えるときに元の日本語と全く異なる表現を用いていた。私は自然な韓国語を全く使えないことを思い知った。韓国語はペラペラなんかではなく「留学は『失敗』だった」という考えが頭をよぎった。

ある日、別のアルバイトで運営補助に携わっていたセミナーに心が惹かれた。英国への食品輸出に関する日本貿易振興機構（ジェトロ）のセミナーだった。講師が英国駐在時に実施した調査について、日本企業を対象に講演をしていた。外国で調査を行い、得られた知見を日本社会に広く発信するという講師の姿、働き方がカッコよかった。私のやりたかったことが見つかった。自らの韓国留学で

得た限定的な知識を社会に伝えるのではなく、韓国に限らず世界の最新情報をつかみ日本社会に発信することで日本と世界を結び付けたいという衝動が芽生えた。

修士1年生から2度目の就職活動を行い、同じ失敗は繰り返すまいと苦手な自己PRをみっちり対策した。希望していたジェットロに就職することができた。留学経験を自分なりに日本社会で生かす方法を見つけた。多少遠回りをしたが、留学の選択は決して間違っていなかった。



朝日（江陵にて）

## 終わりに

2017年春に大学院を修了し、私は現在日本企業による海外でのルールづくりの支援等に携わっている。世界のルールに関する情報を、セミナーや個別相談を通じて日本企業に発信することは、就職活動のときに望んでいた仕事そのものである。韓国留学と直接関係はなく、むしろ大学院の研究内容と関連している。将来的には、韓国との関連事業にも携わりたいと考えている。

私は「留学の『成功』」を夢見て韓国に渡り、「成功」したと鼻高々に帰国した。だが、その「成功」はいつまでも続かなかった。脆く儂い思い出に過ぎない「成功」にすぎり続ければ、次の「成功」は生まれない。過去への満足が後悔に変わったときこそ、次のステップへと成長するチャンスである。

思い返せば、私は大学入学後自己紹介が苦手だという理由で、特技を見つけるためハンゲルに取り組んだ。そんな低次の目標は知らないうちに乗り越えていた。韓国で「特技は韓国語です」なんて言えば笑われてしまうだろう。それよりも自分自身がどう生きていくのかを韓国では模索していた。毎日、悔しさや恥ずかしさを抱きながら、埋没しないように暮らしていた。そのようにもがき苦しんだ経験があったからこそ、私は就職に失敗してもひるまなかった。今の職場との出会いは偶然だったが、「せっかく遠回りをしているのだからあらゆるものを吸収しよう」という姿勢でいたことがプラスに働いた。

留学時の悔しい思い出の一つに、英語が下手で留学生の友人をあまり作れなかったということがある。留学の「失敗」と言ってもいい。だが、悔しい「失敗」は、努力次第でこれから挽回することも可能である。「成功」と「失敗」を繰り返して一歩ずつ成長する私の留学は、これからも続いていく。